

の運動は穩健かつ漸進的であつた。県当局は、同志会によつて融和政策をすすめるとともに、水平運動に対する取締まりを強めていった（『奈良の部落史』『奈良県同和事業史』『奈良県水平運動史』）。

第四節 教育と文化

1 教育の新展開

小学校の整備

大正期を迎えて奈良市では、市勢の發展にともなつて就学児童が増加し、市立小学校が三校では十分に収容しきれなくなつた。大正五年（一九一六）四月、西木辻町に第四尋常小学校（現済美小学校）を設立、さらに大正十一年十一月には、佐保村の合併を見越して、佐保村大字法蓮に第五尋常小学校（現佐保小学校）を開校した。翌年四月に佐保村を合併すると、旧佐保村の児童を第五小に収容、学校所在地は奈良市法蓮町となつた。その後も学齡児童が増えつづけ、これに対応するため奈良市では、大正十五年度に三万四六〇〇余円で第一小学校（現椿井小学校）を増築し、四万九〇〇〇余円で第三小学校（現数飯小学校）の改築を行つた。

尋常小学校卒業後、高等科へ進学を希望する児童も増加したので、大正四年（一九一五）四月に第二小学校（現飛鳥小学校）に高等科を併置し、男四七人、女二人、計六九人を収容した。その後も高等科進学希望者が年々増加したことから、大正十一年四月に第一・第三・第四の各小学校に高等科を併置、新しく開校した第五小学校にも翌年に高等科を併置したので、ここに奈良市内の小学校はすべて尋常高等小学校となつた。

このころ義務教育である小学校の授業料は、これを徴収しない原則になつていたが、これを定めた明治三十三年



大正初期の学習風景（第二＜飛鳥＞小学校）

（二九〇）の勅令第三四四号には「特別ノ事情アルトキハ府県知事ノ認可ヲ受ケ市町村立尋常小学校ニ於テ授業料ヲ徴収スルコトヲ得」という条項があり、同時に改正された小学校令施行規則で、その場合の授業料は「市ニ在リテハ一箇月二十銭以下、町村又ハ町村学校組合ニ在リテハ一箇月十銭以下ニ於テ其ノ金額ヲ定メ」るよう規定した。

奈良市では、この特例にしたがい、明治四十年三月三十日付の市立各小学校授業料徴集規定で小学校尋常科一〇銭・高等科三五銭と定めたが、四十五年三月、これを改定（四等）し小学校児童一人一か月一〇銭、ただし一家二人以上の場合、一人は全額、他は半額とした。その後高等科の授業料について、大正三年（四四）三月四〇銭とし、六年には五〇銭に値上げしたが、八年には尋常科も二〇銭に値上げし、高等科も一円とした（六等）。なお補習学校の授業料は、十一年に商業補習学校を一円としたが、十二年、第五小学校（現佐保小学校）にできた農業補習学校は五〇銭に定めた。奈良市が小学校尋常科の授業料の徴収をやめるのは、昭和五年（二五）からのことである。

また、奈良市は明治四十三年（五三）四月、町政当時から学区制を廃止したが、大正十五年（二五）三月、第一小から第五小にいたる各小学校の児童通学地区を定め、同年四月から実施した。

なお、盲ろうあ教育については、明治二十三年（八三）の小学校令に、市町村は盲啞学校をおくことができるとしたのが最初で、その後各地に盲学校、ろうあ学校がつくられ、大正十二年（二二）には、全国で官公私立合わせて八〇校に達した。そして、大正十二年八月、盲学校及聾啞学校令が発令された。奈良市では、大正九年三月、山田安民が奈良市東向南町に私立奈良盲啞

学校を設立、大正十三年六月に盲学校令の実施により学則を改め、私立奈良盲学校と改称した。翌十四年、天理教管長中山正善が校長となり、高畑善提町に移転した。大正十五年度における学校の規模は、教員四人、生徒児童二人であった。そして、昭和六年（二五）四月、県へ移管するとともに聾啞部をおき、奈良県立盲啞学校と改称した。

この時期、旧郡部各小学校の動きにつきのようことがあった。大正二年（二五）、田原村立田原尋常高等小学校は、柚の川分教場を設置した。また辰市村立辰市尋常高等小学校では高等科を廃止している。

柳生村では、大正十年（二五）、村会が柳生尋常小学校を柳生第一尋常小学校、邑地尋常小学校を柳生第二尋常小学校に改め、丹生尋常小学校を第二小の分校とすることにし、村立農業補習学校の男子部を第一小に、女子部を第二小に付属させることに決めたところ、丹生校区がこれに反対して紛糾がおこった。丹生校区の補習学校通学生三三人が同盟休校に入り、丹生校区（丹生・大保・北野山）の住民約二〇〇人が加わって、中央一校の実現を要望した。村会の決定が宙に浮いたまま学校問題はこじれるいっぽ

表15 奈良市内小学校教員児童数

学 校 名	大 正 5 年		大 正 8 年		大 正 9 年	
	教員	児童	教員	児童	教員	児童
第一尋常小学校	20	986	20	853	18	951
第二尋常高等小学校	20	1,084	24	1,190	27	1,216
第三尋常小学校	18	882	19	869	23	959
第四尋常小学校	18	821	19	861	22	935
第二尋常高等小学校高等科	4	146				
奈良女高師附属小学校	18	尋 321 高 72			18 (兼 6)	387
奈良師範附属小学校	14	尋 249 高 146			14	405
女子師範附属小学校	7	239			7	275

大正6・9・10年度『奈良市勢要覧』から作成。

う、大正十三年にはこのため村長が辞職する事態も起こり、翌十四年を迎えて柳生第一小と邑地第二小を合併して第一小とし、丹生小を第二小とする案も出たが、解決をみないまま昭和に及んだ（四五六）（参照）。

なお、伏見村では、大正十年十二月、六邑尋常高等小学校を伏見尋常高等小学校と改称、十三年二月、七年九月の火災で消失した校舎一棟を新築している。

教育活動 第一次世界大戦中の大正六年（五七）九月、政府は教育調査会（大正七年（一九）に設置）を廃止して内閣直属の充 実 属の臨時教育会議を設置、小学校教育・男子高等普通教育・大学教育および専門教育・師範教育・

視学制度・女子教育・実業教育・通俗教育・学位制度の九つの事項について、その改善策を諮問した。デモクラシー運動や社会運動の高まりに対応するため、天皇制教育体制の再編成を目ざしたのである。「小学校教育ニ関スル答

申」^{（二）}（大正六年（一九））には「国民道德教育ノ徹底ヲ

期シ、児童ノ道德的信念ヲ鞏固ニシ、殊ニ帝国臣

民タルノ根基ヲ養フニ一層ノ力ヲ用フルノ必要アリ

ト認ム」とあった。答申に基づいて、大正八年

二月と三月に小学令と施行規則が改正されるが、

主な改正点は、理科を重んじて科学教育に力を入れるとともに、地理・歴史の時間配当をふやして

国民道德の育成につとめようとしたことであった。

大正デモクラシーの流れ、ことに社会主義思想の台頭に対処することをめざしたもので、大正十二

年には国民全体に対し、「国民精神作興ニ関スル詔書」が出された。

明治四十三年（一九〇）から使用されていた国定教科書が改定され、大正七年（一九一八）から第三期国定教科書が使われるようになった。国語は「ハナ ハト マメ マス」で始まる「尋常小学国語読本」にかわった（従来の「尋常小
部使われたもの」）。「南米だより」「ヨーロッパの旅」などの国際的な教材がふえた。いっぽう「大日本」「神風」「一太郎や
あい」「水兵の母」など、国家主義的、軍国主義的な教材も登場した。日本歴史の教科書も、皇国史観を強め、国
家主義的傾向を色濃くした。大正十五年四月、小学校令の改定があつて学科目中の日本歴史が国史に改められた。
なおこのとき、高等小学校の学科目も改正され、実業課目を必修とし、女子のために家事を加えるとともに、学級
担任制に学科担任制を加味し、専科正教員をおくようにした。

他方、大正デモクラシーの高揚を背景に教師中心の画一的なつめ込み教育を排し、子どもの個性や自発性を尊重
しようという自由教育運動が台頭した。欧米の教育理論や実践が紹介され師範学校の付属小学校や私立学校を中心
にドルトンプラン・プロジェクトメソッド、合科教授、直観教授などの「新教育」が実践され、初等教育界に大き
な影響を与えた。

こうしたなか、奈良市の小学校では、訓育に力を注いでいたようにみえる。第一尋常小学校（現樽井
小学校）について、
これをみておくことにしよう。同校が第一次世界大戦中に作成した「訓練要目及実施案」によると、訓育の目標を
つぎのように定めている。

本校八十種ノ訓練要目ヲ定メ之カ習慣ノ養成ニ努メ修身科其他諸学科ニ於テ授ケタル道德的智識ト相待テ児童ノ感情意志ヲ
陶冶シ品性ヲ高尚ニシ至誠以テ事ニ当リ常ニ教育ニ関スル勅語ノ聖旨ヲ奉体スル忠孝両全ノ良国民タル基礎ヲ作ランコトヲ
期ス

ここでいう「十種の訓練要目」というのは、姿勢、清潔整頓、質素、従順、敢為忍耐、親切、規律、礼儀、共同、公德の一〇項で、これらの実施細目を学年別にこまかく配当している。

同校は同じころ「訓育要項」を作成しているが、これによると、児童の訓練要目を、(一)時間的方面、(二)物質的方面、(三)動力的方面の三つに分け、それぞれの訓練内容を細部にわたって規定している。(一)時間的方面では、起床と就床、登下校の心得、遅刻早退の防止（これについては「朝祥の懲罰」に「児童は其級の前に整列せしむ」とある。なお、朝祥は雨天以外の日の朝、始業一〇分前に教師、児童全員を運動場に集めて行つた。）、教室の出入、掃除など、日常の作法を指示しているが、このなかで、旅行遠足も取りあげ、つぎのように定めている。

学年	日数	経費
一年 春日神社・若草山	一	〇
二年 木津川	一	五錢
三年 竜田・法隆寺・郡山	一	一〇錢
四年 橿原神宮・神武陵	一	二〇錢
五年 談山神社・吉野山	二	一円
六年 伊勢神宮	二	一円五〇錢

(二)物質的方面では、学用品、衣服その他所持品、貯金、公共性、廃物利用などについて、受持教師はたえず検閲して、親切に注意するよう指示しており、学校で月額五錢の郵便貯金をさせて、修学旅行の費用にあてることにしている。なお列国の経済状況についての統計表をつくり、欧州戦争終結後の列国の経済戦争に備えての自覚を高めさせることを求めている。また、(三)動力的方面では看護、賞罰、命令禁止、言語、共同作業についての訓練を具体的に示している。

このころ、学習方法についての研究も活発になってきたが、市内はもとより各地の小学校教育に大きな影響を与え、全国的に注目されたものに奈良女子高等師範学校附属小学校の合科学習があった。大正八年四月附属小学校主事となった木下竹次は、低学年における総合学習である合科学習法を説き、また自律的学習、独自学習と相互学習など、児童の主体性を重んじる教育方法を説き、その指導による教育実践が同校において行われた。大正九年（一九二〇）から授業の公開を行うとともに、毎年学習講習会を開き、全国から多くの教員を迎えて合科学習についての指導を行った。十二年の第四回講習会の参加者は二四〇一人に及んだという（『わが校五十年の教育』）。十年四月に児童向けの雑誌『伸びて行く』を創刊、翌年四月からは教師向けの研究機関誌『学習研究』も発刊した。木下の学習論と女高師附小の実践は、「奈良の学習」として大きな反響を呼び、大正自由教育運動の一翼を担ったのであった。これに対し文部省は「奈良では生徒と教師とを平等にしているからいけない、教師を環境と見るのはいけない、奈良は法令を無視している、それに修身の教科書を用ひない」と強く非難したが、木下はこのため学習法の研究が後退してはならないと教師たちを励ましたという（『わが校五十年の教育』）。その後昭和二年（一九一七）十月をもって『伸びて行く』は休刊となり、十六年三月には『学習研究』も終刊となる。そして木下は同年三月奈良女高師を辞職した。教育の国家統制が強まるにつれ他の新教育運動と同様「奈良の学習」もしだいにその力を失っていったのである。

なお、師範学校および女子師範学校の各附属小学校では、奈良県教育会の機関誌である『奈良県教育』の各号に「附属だより」という章を設けて県下の各小学校との交流をはかっているが、これによると両校では、毎年「初等教育研究会」を開催している。同誌の大正七年九月号には、女子師範附属小学校では、同校の児童構成が佐保村の児童全部と市部の児童との混合であるうえ春季のほか秋季にも児童を募集して複式の学級構成をしているので、いろいろと困難が多いとあり、同誌大正八年三月号には、師範学校附属小学校で、三箇学年の複式教授を試み、また、

尋常五・六年生を中等学校進学希望者とそうでない者とを別々に学級を編成するとみえる。また児童学芸会を毎年行い、さらに、大正七年より学校行事として夏休み中に「夏の学校」と名づけて、三年以上の児童を集め七月末から八月はじめにかけての十日間の午前中、集団指導を行うことにしている。

中等学校 奈良市は県庁所在地でありながら、長い間県立中学校がなく、大正十年（一九二一）の時点では、県の増加内に県立三校（郡山・畝傍・五条）、私立二校（天理・十津川文武館）があるだけであった。県都に県立中学校を誘致することは、かねて市民の強い要望であった。いっぽう、中学校への進学希望者は年々増加し、大正十一年には五校まとめた競争率が約二倍に達した。奈良県会は、同年入学難緩和策として県立中学校を奈良市に設置することをきめた。

そこで奈良市では、その用地として合併を予定していた佐保村法蓮の田地六一四一坪五合を県に提供するとともに、一〇万円の寄付金を集めることにした。十一年十一月に用地の買収が完了、翌十二年八月から整地にとりかかったが、九月一日の関東大震災で不景気が深刻化したこともあって、奈中建設寄付募集特別委員会の募金は難航した。奈良市では、県立奈良中学校建設寄付募集に関する市議会正副議長と参事会員との協議会を開くなど、市長佐川福太郎の非常な尽力によって、翌年ようやく目標を達成する。

奈良中学校は、大正十三年（一九二四）二月、文部省の認可を得て県立として開校したが、校舎の建築工事が遅れた。そのため入学試験は師範学校の講堂を借りて実施し（志願者一九三一人、合格者一〇八人）、入学式は県公会堂で挙行された。授業もはじめ奈良図書館の二階を仮教室として行い、五月木造瓦葺二階建の本館の完成により新校舎に移った。ちなみに、翌十四年度の第二回入学者の住所をみると、奈良市居住者八三人、市外居住者一七人となっている。

さきの臨時教育会議の答申に基づいて、大正八年（一九一九）中学校令の一部改正が行われ、中学校の目的に「特二

初期の奈良中学校



表16 大正3年奈良市関係中等学校等学事一覧

	学 校 名	学 級	教員	生 徒	入 学 志願者	入学者	經常費	授業料 収 入
県 立	師 範 学 校	一部 8	23	一部 291	189	80	43,575	770
		二部 1		二部 30	47	32		
		附属 13	15					
	女 子 師 範 学 校	4	12					
		附属 8	7	148	93	43	23,684	462
市 立	奈良実科高等女学校	5	11	156	78	57	7,006	1,822
郡 立	添上郡第一農林学校	3	5	112	68	63	3,558	
	添上郡第二農林学校	3	5	75	38	38	2,872	
村 立	柳生村立女子学校	2	3	60	18	18	1,019	
私 立	奈良刺繍女学校	2	6	68	35	26	10,105	355
	奈良育英学校	1	2	34			636	
	勸 学 院	2	2	10			500	
	正 気 書 院	1	5	85			800	
	奈 良 女 学 校	1	5	57			818	
	私立法相宗勸学院	3	2	37			75	

『奈良県学事一覧表大正3年版』から作成。

国民道徳ノ養成ニ力ムベキモノトス」との一文が加えられたが、同会議の「兵式体操振興ニ関スル建議」にしたがつて十四年四月に陸軍現役将校配属令が公布され、大学を除く中等以上の学校では、官公立・私立を問わず、正科として教練を必修させることになる。奈良中学校では、これに先立つこと一年、第五三連隊に要請して将校二人と下士官二人の派遣を受け、週二回軍事教練を始めている。生徒の規律訓練に資そうとしたもので、保護者にその趣旨を配布して理解を求めた。

奈良中学校の創立に先立って、大正九年（一九二〇）十月に県立商業学校の設立が認可され、翌十年四月に開校、はじめ一年間は奈良師範学校に仮住まいしていたが、翌年三月船橋町の新校舎に移った。当時、実業学校には、修業年限が五年の甲と三年の乙の二種があったが、しだいに甲が増加する傾向にあった。県立商業学校は、当初、予科二年、本科三年とし、それぞれ五〇人の定員で志願者を募集したが、奈良県内だけでなく京都府南部からも志願者があり、予科は八倍、本科は三倍の競争率だったといわれる。大正十一年、本科・予科の別を廃止し、入学資格を尋常小学校卒業程度、修業年限五年、一学年定員一〇〇人とした。

農業関係では、すでに早く添上郡立農林学校があった。同校は、明治三十九年（一九〇六）四月に開校（東市小学校と念仏寺に各一教室を借りて授業を開始、翌四十年東市村古市に新校舎を建ててここに移った）、柳生に分校を置いた（柳生小学校を借りて授業開始、四十一年大宇柳生に移転）。いずれも高等科二年修了を入学資格とする修業年限三年の乙種実業学校だったが、明治四十一年義務教育年限の延長にともない、入学資格を尋常小学校卒業に改めた。四十二年四月、本校を添上郡立第一農林学校と改称、柳生分校を独立させて添上郡立第二農林学校とした。大正十年（一九二一）四月、両校を廃して添上農学校を設立（機本実業女学校の教室を借りて授業開始、翌十一年七月機本町の新校舎に移転）、十二年四月郡制の廃止にともなって県立に移管、奈良県立添上農学校となった。現在の県立添上高等学校の前身である。

大正の末期には、私立の夜間学校も設立された。「指定を受けた中学校に類する各種学校」にあたるものである。

もと軍人で退役後天理中学校の教員だった藪内敬次郎が、大正十四年四月に南都正強中学校を設立して、その校長となった。修業年限は五年、生徒定員は二五〇人^(二学年)（五〇人）^(五年)。はじめ薬師寺境内の一隅にあったが、昭和二年（一九一七）、伏見村に移った。また大正十五年（一九二〇）一月には、東大寺勧進所の一部を教室にあてて、金鐘中学校が設立された。初代校長は東大寺住職鷲尾隆慶、修業年限は五年、第一回入学生は四五人で教職員は二六人であった。

つぎに高等女学校についてみておくことにしよう。明治四十四年（一九二二）五月に、市立奈良実科女学校が設立され、つづいて九月に奈良女子高等師範学校附属高等女学校が開校されていたが、大正五年（一九二〇）五月、奈良実科女学校が女高師に移管されて奈良女子高等師範学校附属実科女学校となった。

女高師附属高等女学校には、修業年限は四年の本科と二年または一年の補習科があり、生徒定員は本科三六〇人、補習科は六〇人であった。市内のほか遠くからの生徒もあり、寄宿寮をもっていた。附属実科高等女学校は、家政科を主とする高等普通教育を行ったが、本科の修業年限は四年、補習科は一年、生徒定員は本科約一八〇人、補習科は約二〇人であった。大正九年、高等女学校令の改正^{（四か年を原則とし特例として五年制・三年制を認めていたのを、修業年限を五年または四年とし、専攻科または高等科の設置を認めた）}があつて、附属高等女学校は修業年限を五年にするともに補習科を廃止した。

師範学校の予備課程として明治三十九年（一九二〇）一月に設立された私立奈良育英学校は、大正五年（一九二〇）三月、修業年限三年の実科高等女学校的な学校に姿をかえて育英女学校と改称、藤井高蔵が校主^{（のち校長）}になった。大正十二年にいたり、これを奈良女子高等裁縫学校と改称するとともに、新たに奈良育英高等女学校を設立、修業年限、本科四年・補習科一年、定員四〇〇人とした。奈良市から元第五小学校舎の無償払下げを受け、同年十二月および大正十四年五月に校地を拡張し、しだいに学校規模を大きくした。

なお、女子の私立学校として、ほかに奈良刺繍女学校・奈良女学校などがあつたが、いずれも家庭婦人となるた

第三章 奈良市の発展

めの手芸・家事等の教養を深めることをめざしたものであった。奈良女学校の同窓会誌『まどい』第二号（大正十五年一月発行）掲載の校長上場顕弘の「婦人問題の帰趨」という文によると、婦人の社会的地位は男子に比べて低いし、将来男子と対等の地位を得べきことは当然だが、その前に自らの知識向上をはかることが必要だ。男女は生理的に別なので、婦人の前では煙草をすえないような習慣は御免蒙りたいなどといっている。

教員養成 諸学校の歩み

大正十四年（一九二五）にいたって師範学校令が改正

された。これにしたがって、奈良県師範学校でも、十一年に設置した予備科を廃し、本科第一部の修業年限を五年に延長して一〇学級とし（本科第二部は従前どおり）、翌年新たに修業年限一年の専攻科一学級を設けた。第一次世界大戦後の社会運動の高まりに対応して「毎月一回講堂訓話ヲ行ヒ穩健着実ナル思想ノ鼓吹ニ努ムルコト」（「大正生徒思想ニ関スル調査」）など、生徒の「思想善導」に力を入れ、同年の生徒心得には「修身三則」として「誠実一貫」「剛健敢為」「清明寛厚」をあげている。なお校外学習にも力を入れ、修学旅行を毎年各学年に実施しているが、大正四年の規定では、本科一部四年生は関東方面、一一泊一二日となっており、大正十四年の規定では、五年生（この年修業年限が五年になる）の旅行先は満州・朝鮮一四泊一五日となっている。

女子師範学校は、大正九年（一九二〇）、修学年限一か年の本科第二部

表17 大正年間の師範学校生徒数の変遷

	本科一部		本科二部		予備科
	在校生	卒業生	在校生	卒業生	在校生
大正4年	279	73	29	33	49
大正6年	279	63	31	0	
大正8年	266	62	27	27	
大正10年	225	53	0	0	
大正12年	263	54	29	32	
大正14年	269	63	37	37	

『奈良県師範学校五十年史』から作成。

（備考）学級編成は本科一部8学級、二部1学級、大正14年に本科一部の修業年限を5年に改め、10学級とし、またこの年に予備科を廃止、二部を2学級とし、専攻科を新設）

を設けたが、十四年の師範学校令の改正で男子校同様本科第一部の修業年限を五か年に延長、翌十五年に専攻科を増設、翌昭和二年（一九一七）、本科第二部の修業年限を二か年とした（男子校の第二部の修業年限が二年になるのは、同六年のことである）。なお、女子師範も昭和六年から満洲・朝鮮への修学旅行をはじめ、同十五年に及んでいる。

奈良女子高等師範学校の草創期の学科編成（入学後四か月の予科と本科に分け、本科は国語（漢文・地理歴史・数物化学・博物家事の四部制）や実技科目の選修制は、東京女子

高等師範学校とは大きく異なり、むしろ男子の高等師範にならったものであった。これは専門への意欲をかきたてるとともに生徒の特性を制度的に生かそうとしたもので、初代校長野尻精一の識見に負うところが大きかったという（『奈良女子大』）。大正三年（一九一四）学科課程を文科・理科・家事科の三学科に改め、大正六年六月には、皇后から

一月に下賜された御歌を校歌に定めた。このころ野尻校長は、自由主義や民主主義の思想に染まらないよう訓話したり、皇后下賜御歌の奉唱を強調したりしている。同九年四月、修業年限一年の保姆（保母）養成科をおき、十月からこれまでの全寮制を改め、三年以上の生徒に一部自宅などからの通学を許可した。ついで大正十一年四月には数学と理科についての第三臨時教員養成所が付設されることになった。なお大正十四年五月に中国からの留学生の予備教育のために特設予科を設け、その年四人の留学生を受け入れ、翌年九月には七人を入学させている。

社会教育 社会教育の一翼を担うものとして、各小学校に補習学校が付設されていたが、明治四十一年の拡充（一九〇七）奈良市はこれを廃止してしまった（参照）。しかしながら、市民の間では補習教育に対する

要望が強く、これにこたえるため、各小学校の同窓会などが中心になって私立補習学校の開設をすすめた。まず、済美実業補習学校が陰陽町の奈良実科高等女校（のちに第四尋常）内につづいて椿友会補習学校が第一尋常小学校

（現椿井小学校）内に、飛鳥校友会補習学校が第二尋常小学校（現飛鳥小学校）内に、鼓阪同窓会補習学校が第三尋常小学校（現鼓阪小学校）内につづかれた（椿友会以下の三校はのち補習学校を夜学部と改めた）。明治四十四年度の各校の生徒数は、済美一〇二人、椿友会二六人、飛鳥三

第三章 奈良市の発展

三人、鼓阪四六人となっている。

大正八年（一九一七）、実業補習学校規定の改正があつて、実業補習学校はたんなる補習教育から職業教育と公民教育に重点をおくものとなり、十三年から教科目に公民科が加えられた。奈良市では、さきに設立された私立補習学校にかわつて、大正十一年四月、第一小学校（現佐保小学校）内に商業補習学校を開設、同十二年に第五小学校（現佐保小学校）内に農業補習学校をおいた。大正十五年には前者を第一実業補習学校、後者を第五実業補習学校と改称するとともに、第二・第三・第四小学校にも実業補習学校を設置した。

近郊の農村でも小学校その他に農業補習学校がおかれたが、大正二年（一九一三）現在、添上郡に属していた村々の状況は表19にみられるとおりである。添下郡の平城村には、押熊・中山・秋篠・山陵・歌姫の五農業補習学校があり、それぞれ三〇〜四〇人程度の生徒を収容していたことが知られる。なお、大正二年当時、大安寺・精華・東山・大柳生・須川・狭川の各小学校には、裁縫学校が併置されていた（表20）。農業補習学校の内容を、明治農業補習学校についてみると（〔明治〕、定員四〇人で、修業年限三年、教授季節は四・五・九・十・一・二・三の七か月、教授日は月・水・金の三日、教授時間は午後六時から九時まで、毎週の科目別時数は、三学年とも修身一・農業三・国語三・算術二、授業料は徴収していない。年間授業時数をはじめ、教授季節や教授日などに異同があったとみられるが、授業科目はどこ

表18 奈良市立実業補習学校

校 名	位 置	設立年月	修業年限	
			初等科	高等科
奈良商業専修学校	第一小学校内	大正11年3月	2年	2年
奈良第五実業補習学校	第五 "	15年4月	"	"
奈良第四家政女学校	第四 "	昭和2年4月	"	"
奈良第五家政女学校	第五 "	2年4月	"	"

表19 大正2年度添上郡補習学校（奈良市統合町村）

名 称	教員数	生徒または 会員数	年 間 授業日数
大安寺農業補習学校	5	105	86
辰市	2	95	134
精華	5	68	86
精帯	4	105	56
明解	2	37	64
東治	7	145	63
佐保	2	23	83
田原	4	30	65
東山	2	46	74
水間	1	30	75
柳生	1	44	44
邑地	1	30	30
丹生	2	42	45
大柳	1	30	72
平尾	1	13	79
忍辱山	1	14	51
阪原	1	20	72
須川	1	42	95
鳴川	1	12	95
狭川	2	30	43

『奈良県教育八十年史』から作成。現奈良市域外の村は省略。

表20 大正2年度裁縫学校

名 称	教員数	生徒または 会員数	年 間 授業日数
大安寺裁縫学校	3	37	256
精 華	3	40	267
東 山	2	54	266
大柳生	2	58	178
須 川	2	26	171
狭 川	2	28	266

『奈良県教育八十年史』から作成。

も同じであった。なお裁縫学校の授業科目は、修身・算術・家事・裁縫・手芸の五科目であった。

その後柳生村では、大正十年（一九二一）に邑地・丹生の両農業補習学校を柳生農業補習学校に統合、女子部は、昼間、男子部は一年生だけ昼間、二・三年生は夜間としている。

日露戦争後、現奈良市域の各地でも青年会（団）の結成をみていたが（第二章第三節）大正四年（一九一五）、内務・文部両省から共同訓令「青年団指導発達ニ関スル件」が出てその再編・組織化がすすんだ。共同訓令は、青年団を「修養

団体」と規定、団員の最高年齢二五歳、町村単位の設定、町村長・小学校長の指導など、青年団に対する国家的基準を明確にしたものであった。その後政府は、翌五年に青年団中央本部を設けるなど青年団への規制を強めていくが、十四年にいたって大日本連合青年団が成立、官製青年団の確立をみることになる。当時の青年団活動を富雄青年団についてみておくことにしよう（『富雄町史』）。

近時都市ノ交通頻繁トナリ、社会悪風漸ク浸染シ、一般生計ノ程度著シク昇騰スルト同時ニ、自然人情目ラ輕薄ニ傾キ敦厚又昔日ノ觀ナキカ如シ、從來本村ノ風俗トシテ、男子十五歳ニ至レハ、其部落ノ青年団ニ加入セシメ、退団ハ廿歳又ハ廿五歳ト、各部落区々ニナリシモ、大正四年ニ至リ、富雄青年団ヲ組織シ、十五歳入団、二十五歳退団ト一定セリ、其期間ハ孰レモ心身ノ修養ニ努メ、将来堅実ナル公民タラントスル素養ヲ得ル目的ニシテ、其事業ハ、各大字ニ支部ヲ置キ、各支部ニ於テ試作田ヲ設置シ、種々ナル農作物ノ試作ヲ為シテ農事ノ改良ヲ図リ、又農繁期ニ當リ、在郷軍人中演習召集及充員召集等ニ応スル者アル時ハ、青年団ヨリ該家ノ手伝ヲナシ、且又里道ノ破損シタルケ所ハ之レカ修繕ヲ為シ、其他公共事業ノ幫助等ヲナセリ、昔日ハ夜遊ヒト称シ、青年ハ夕食後ハ村内妙齡ノ婦女家ニ遊ヒ、又ハ飲食店ニ立寄り、且毎年七・八月ノ頃ニ至レハ、盆踊ナルモノ盛ニ行ハレ、深夜ニ至ルモ尚狂態ヲ演シテ止マサリシコト屢々アリシカ、近時ハ廿年未滿ノ青年ニアリテハ、村立農業補習学校ニ入学セシメ、又廿年以上ノ青年ニアリテハ、之レカ監督ノ任ニ當リ、専ラ学徳修養ニ力メ、昔日ノ如キ弊風ハ近時根絶スルニ至レリ、

表21 市立青年訓練所（昭和10年度入所者数）

	入所者数	年齢 該当者数
第一青年訓練所（第一小学校内）	71	206
第二 “ （第二 “ ）	61	123
第三 “ （第三 “ ）	98	173
第四 “ （第四 “ ）	77	223
第五 “ （第五 “ ）	78	260

表22 奈良市内各学校生徒数

校 名	所在地	大正 5 年		大正10年		大正14年	
		教員	生 徒	教員	生徒	教員	生徒
奈良女子高等師範学校	北魚屋西町	30 (兼5)	本 科 255 研究科 1	45 7	244	44	447
附 属 高 等 女 学 校	"	24 (兼4)	本 科 328 補習科 15	14 7	250	18	439
附属実科高等女学校	"	8 (兼4)	本 科 170	8 4	149	16	229
附 属 小 学 校	"	18 (兼2)	尋常科 321 高等科 72	18 6	387	19	432
附 属 幼 稚 園	東向北町	6		5	162	8	235
奈 良 県 師 範 学 校	登大路町	20	一 部 370 二 部 131	18	188	27	433
附 属 小 学 校	"		尋常科 349 高等科 146	14	405	15	455
奈良県女子師範学校	北魚屋東町	9		13	116	15	251
附 属 小 学 校	"	7		7	275	8	256
奈良刺繍女学校	下三条町	6		6	43		
正 気 書 院	小西町	6		7	19	4	82
勸 学 院	雑司町	5		5	24		
育 英 女 学 校 (奈良育英高等女学校)	花芝町	12		10	115	27	350
奈 良 英 語 学 校	東向南町	3		4	60		
奈 良 女 学 校	中院町					8	50
金 鐘 中 学 校	雑司町					11	43
奈良県立商業学校	船橋町					15	458
" 奈良中学校	法蓮町					11	268
奈 良 盲 学 校	菩提町					(大正15年) 4	22
済美実業補習学校	第四小内	2		4	25		
椿 友 会 "	第一小内	2		2	34		
飛鳥校友会夜学部 (はじめ飛鳥校友会補習学校)	第二小内	4		3	65		
鼓阪同窓会夜学部 (はじめ鼓阪同窓会補習学校)	第三小内	4		4	56		

各年度の『奈良市勢要覧』から作成。

大正十五年（一九二六）四月、政府は「青年訓練所令」を出して、男子勤労青年に主に軍事訓練を行うための教育施設として、青年訓練所をつくることにした。背後に陸軍の意向があり、「軍事教育による思想善導」を意図したものとされる。これをうけて奈良市では、同年七月、各市立小学校に青年訓練所を開設した（表21）。対象は一六～二〇歳の青少年、教科は修身・公民・教練・普通学科・職業科、軍事教練の指導には在郷軍人があつた（訓練終了後、訓練所が認められた）。

2 日本文化と奈良

伝統を受け 近代奈良の黎明期から明治二十年代に及ぶころの学問や文芸は、当然のことながらやはり前代の継いだ学問 遺風を受けることの多いものであつた。学問について見れば儒教系の学者の活動が目につく。ま

ず柳生藩の儒官であつた岡村閑翁をあげよう。閑翁は文政十年（一八二八）に郡山藩儒官の藤川家に生まれ、大和の大儒森田節斎の門に入り伴林光平と交誼を結び、文久二年（一八六二）に柳生藩士岡村家に入り、柳生藩の儒官として同藩子弟の訓育にあたつた。その後明治十三年（一八八〇）に生駒の大乗滝寺に移り、広教学舎の教授となり、大正八年（一九一八）に没している。閑翁の儒学は陽明学の立場に立ち、学問は単に知識をうるためにするものではなく、知行合一を強く主張するものであつた。

つぎにあげるべきは石崎勝蔵である。かれは弘化四年（一八四七）に山辺郡都祁村の福井家に生まれ、石崎家に入つて医を志した。奈良奉行所の明教館で漢学を学び、号を杏陰といつた。京都に遊学して医学を学び、明治四年

(六七)に奈良の後藤町で開業医となった。また別に有志と寧楽舎をおこして漢学や和歌の会を催し、のちさらに西洋医学も講究している。そして明治二十三年には家に文庫をつくって和漢書や墨跡を集め、「石崎文庫」として公開した。場所は、高畑町の浅香山下、明治以降奈良で初めての図書館であった。なお同文庫の図書は戦後大阪中之島図書館へ移された。杏陰は大正四年(一九一五)に和漢藥研究会を、同七年には奈良の高齢者を招いて尚齒会を開いており、同九年に没した。

さらに儒者としては越智宣哲がある。慶応三年(一八六七)に丹波市の田井庄に生まれ、大阪の藤沢南岳に儒学を学び、明治二十五年(一八九二)に郷里に帰り「正気書院」という塾を開いた。同三十三年に奈良に来て翌年極楽院に夜学を始めたが、四十四年に小西町に正気書院を開設した。そこでは積奠(せきてん 孔子を祀る典礼)を奉行し、院内に聖廟を建てて儒教による育英事業を実行した。大正三年(一九一四)の統計によると、一〇科目、修業年限二年、生徒一一五人、創立以来の卒業者は一四三〇人を数えている。かれの主張は敬身・敬学・敬事に集約され、この三敬の銘を院訓とした。この正気書院は、のちに財団法人正気書院商業学校となる。

奈良の地誌としては、江戸時代中期に村井古道の『奈良坊目拙解』の名著があったが、寛政年間(十八世紀末)にこれを簡略化した『平城坊目考』が久世霄瑞によって出された。この書は、明治二十三年(一八九二)に金沢昇平によって訂正を加えられ活版刊行されたが、金沢はさらにその不備を補い、補遺として『平城坊目遺考』を著し、名所・旧跡・公園・山川・池沢・墳墓などにも言及している。この江戸時代の流れを受けた地誌に対し、別に新たな地誌の編集がすすめられた。すなわち同じ二十三年に奈良県知事小牧昌業がその研究編集に力を入れ、これを大和神社宮司斎藤美澄に託したのである。斎藤は安政四年(一八五三)に山形の酒田に生まれ、その地名論などが認められていたが、二十三年(一八九二)に大和神社に来て、地誌の編集に携わった。二十五年に大神神社宮司となり、その翌年に大

神社社の沿革を語る『三輪叢書』を編み、二十七年にかねて編集を託されていた地誌を『大和志料』として脱稿した。『大和志料』は、引証が正確豊富で正鵠を得ていて史学上の価値の高い稿本だったので、奈良県教育会が県に請うて大正三年（一九一四）に大正天皇御大典記念として上巻を出版、翌年下巻を出した。

伝統芸術 芸術の面で明治維新前後の混乱をきりぬけて伝統を保ったものの一つは奈良人形であろう。江戸時代のすでに奈良人形の域をこえて彫刻的造形に達していた。かれの後期の制作活動では古代彫刻の模刻にも力を入れたが、その技の冴えはここにも示された。杜園は彫刻のほか茶・花・書・画・和歌・音曲をもよくし、とくに狂言では山田弥兵衛と称して一家をなし、明治二十七年（一八九四）に没した。杜園のほかは奈良人形の伝統を伝えた人には、岡野松寿家の松寿惟孝・中条良園・竹林高行らがある。明治三十年奈良で初めての美術団体「奈良美術会」が結成されたが、それは奈良人形を中心とする会であった。そしてこのころから一刀彫奈良人形または奈良一刀彫というようになったのである。

彫刻といえ、奈良にはもう一つの流れとしてさきに述べた新納忠之介を中心とする奈良美術院があった。ここには、仏像修理につとめるとともに優れた彫刻を製作した人たちが育っていた。菅原大三郎・明珍恒男・細谷而楽らである。明珍は洋画家中心の東台会（後述）にも出品し、新納をついで昭和十年（一九三五）から奈良美術院の二代目院長となる。絵画の分野では、鹿の絵をもつて知られた内藤其淵の弟子堀川其流がある。文政八年（一八二五）に山辺郡に生まれ、弘化三年（一八四〇）一二歳のとき奈良京終町に移住し、其淵に学んで鹿の絵をもつて知られた。なお御家流の書道にも優れ、晩年には風俗改善事業にもつとめ、明治四十四年（一九一〇）に没した。

明治・大正期の奈良の文人としては、まず山村田照寺の文秀女王をあげねばならない。御家流書道の名手として



依 水 園

知られるが、歌人としても令名をはせている。天保十五年（一八四四）に伏見宮家の王女として生まれ、嘉永四年（一八三二）得度、ついで円照寺の第六世をつぎ、大正十五年（一九二五）になくなっている。その和歌の数は数万といわれ、一部は『宝樹和歌集』として出版された。つぎに文人としても知られた関藤次郎がある。かれは元治元年（一八六〇）に下御門町の豪商の家に生まれたが、茶道に造詣深く宗無と号し、その道の復興につとめた人として知られる。また明治三十二年（一八九七）に名園「依水園」を造った。依水園の場所は東大寺南大門の西で、もと興福寺摩尼珠院の別業のあった所といい、延宝年間（一七〇三～一七一八）に晒業者清須美道清が別邸としたのが前園で、後園は関が完成したものである。若草山や東大寺を借景とする風情に富んだ庭園で、昭和五十年（一九七五）に名勝に指定される。

奈良における伝統芸術といえば金春の能楽がある。江戸時代奈良にとどまり、五〇〇石を給されていた金春座は、維新の神仏分離や俸禄の中絶によって大打撃を受けたが、金春広成らは明治十三年（一八八〇）に春日おん祭の後日能をつとめ、また興福寺新能も再興した。この行事はその後断続はあるが、この両神事能を軸として金春家の能楽の伝統は保たれた。金春流能楽の維持で苦闘した広成は、明治二十九年に没し、そのあと儀広・広運が家元を継いだ。この間に同家に伝えられた世阿彌や禅竹の自筆文書を含む金春家伝来の資料は生駒の宝山寺に移っているが、同流の復興への努力によって明治四十一年には奈良金春会が発足し、金春光太郎が伝統を守った。また狂言は大蔵流が伝統をつたえている。なお昭和三十七年（一九六二）には奈良金春能楽堂が完成して奈良能楽の本拠となっている。つ

ぎに雅楽についてみると、南都楽所は明治三年に廃止され、ついでその記録類を収めていた水室社境内の土蔵も解体されたが、八年から春日社で雅楽の稽古が始まり、明治三十六年に芝葛敏らを中心に奈良楽会ができ、春日祭に奉仕し、大正四年（一九一五）には御大典記念事業の一つとして奈良雅楽会が組織されて伝統が守られてきた。その後維持に困難な時もあったが、昭和七年（一九三二）に春日社の宮司江見清風を会長として春日神社古楽保存会が発足し、雅楽の近代化だけでなく、おん祭に奉納される田楽・細男（せいのお）などの古楽をもあわせて伝承保存することに貢献した。

古代奈良文化 明治二十年代は、『史学雑誌』に代表される近代歴史学やフェノロサに導かれた美術史学が新し
 化の研究 展開し始めた時代であった。そこで奈良の古代文化は、この新しい学問の照射を受けることになつたわけで、それを象徴するのが学界を賑わした研究論争であった。

その一つは、明治二十一年（一八八八）に出た伊東忠太の『法隆寺建築論』とその後輩で奈良で活躍していた関野貞の論考によって法隆寺建築の研究が進み、三十年代以降関野貞・平子鐸嶺・喜田貞吉らによって展開された現法隆寺の再建非再建論争である。その二は前章の平城宮跡の項でふれた関野貞と喜田貞吉との間でかわされた平城京に関する論争であり、その三は薬師寺の建造物と彫刻の移転非移転、移座非移座の議論である。薬師寺論争は、関野貞が明治三十四年に金堂の薬師三尊を天平様式とし、その翌々年に東塔を白鳳様式としたのに対し、喜田貞吉が仏像・東塔それぞれについて反論を加えたものであるが、結論は戦後にまで持ち越される。そのほか元興寺の寺名と移転についても明治三十七年から大正年代にわたり重田定一、平子鐸嶺・喜田貞吉らの間に議論の展開があった。

天平の奈良や古代寺院の歴史・美術の研究の進歩を語るものは、ただ学会の論争だけではなかった。『大和人物志』が明治四十一年に完成、天皇の行幸に際して御覧に入れ、その翌年刊行された。この書は県の要請によって佐々政一が主任となり水木要太郎と田名部彦一が協力してできたもので、人物志といえ単なる人物伝の集成ではなく、

時代の概説を含む優れた歴史書である。つぎに大正二年（一九一三年）八月には、奈良県教育会の求めによって日本歴史地理学会が県公会堂で奈良時代文化に関する講演会を催し、その講演集が『奈良時代史論』として翌三年に出版された。当時の歴史・美術・建築・文学などの学界を代表する学者が名を連ねていて、優れた論文集となっている。また、大正天皇の大礼記念に県教育会が計画した『奈良県風俗志料』も大正四年に稿が成った。

しかし奈良の古代文化を回想して一般世間に大きな影響を与えたものは、何といっても大正八年に出た和辻哲郎の『古寺巡礼』であろう。和辻はこの書を「大正七年の五月、二・三の友人とともに奈良附近の古寺を見物したときの印象記である」といい、「学問の書ではない」といっているが、その広い世界史的視野と深い日本文化への洞察のうえに語られたこの奈良文化印象記は、当時のアカデミズムのレベルの高さを示すもので、単なる紀行文でも印象随筆でも案内記でもなかった。しかも新薬師寺・西ノ京・法華寺・東大寺・斑鳩地方などをめぐる叙述は、その名文によって多くの人々を大和巡礼にさそった。大正時代はまさにこうした奈良の古代文化への学問的回想が多くの実りを残した時代であった。

大正十年には郷土の研究家辰巳利文を中心とした奈良文化研究会ができて、機関誌『奈良文化』を出し、同十二年には大和の歴史・文学に詳しい水木要太郎らを中心に大和史学会が発足して、雑誌『やまと』（後に『大和史』と改題）を出し、十三年には古美術の写真で知られた飛鳥園から『仏教美術』（後に『東洋美術』と改題）が発刊された。また同年に東大寺寧楽会が成立して『寧楽』を刊行し、（のち『夢殿』と改題）が刊行されている。さらに東京美

術学校が編集した『七大寺大鏡』の出版が大正三年から昭和四年（一九二五）にわたっており、明治二十二年（一八八九）
 発行以来つづいている『国華』にも奈良の仏教美術遺産がしばしばとりあげられた。考古学分野でも大正九年
 （一九二〇）に小泉頭夫を中心に大和考古学会ができて会報を出し、同十四年には乾健治の『考古の大和』が出ている。
 このように大正期に百花咲き乱れた奈良の古代文化についての研究は、やがて昭和三年（一九二八）九月に出た論文
 集『天平の文化』に大成されたということができる。これは、朝日新聞社がこの年秋の即位大礼を記念し、かつ天
 平改元千二百年の回顧をかねて講演会と展覧会を開催、その時の講演をまとめたもので、内容はつぎのとおりであっ
 た。

天平時代の仏教

松本文三郎

天平時代の舞楽について

田辺 尚雄

天平時代の工芸について

六角 紫水

万葉集と天平時代

武田 祐吉

正倉院御物に就いて

大島 義脩

天平時代を中心として印度と日本との関係

高楠順次郎

奈良の都と其の宮城の遺址に就いて

喜田 貞吉

天平時代の芸術

滝 精一

天平時代の国語

新村 出

天平時代の建築

伊東 忠太

天平時代の建築について

天沼 俊一

寧楽時代の彫刻

関野 貞

文化史上に於ける天平時代の民衆

西田直二郎

天平時代に於ける絵画

沢村専太郎

天平時代の於ける宮廷の服飾

原田 淑人

唐代の文化と天平文化

内藤虎次郎

天平時代の政治

三浦 周行

奈良を訪れた 文人たち 奈良の風土と文物に心引かれて、奈良を訪れる文人も多かった。すでに早く明治二十八年（一八九〇）秋、正岡子規が奈良に来て東大寺近くの角定（対山楼）に泊まり、

大仏の 足もとに寝る 夜寒かな

行く秋や 奈良の小店の 古仏

などの句を残している（『寒山落』（本）所収）。また、三十一年に奈良を訪れた田山花袋は、三十四年に「寧楽の古都」と題する紀行文を発表、その中で「若草山の絶嶺からうら／＼と霞み渡った古昔寧楽の都を望んだ事」を、忘れ得ぬ光景としてあげている。花袋には「奈良雨中記」（『山水小記』（所））の一文もあり、末尾に平城宮跡の保存運動をすすめていた棚田嘉十郎と面談したことがみえる。

四十一年の春、志賀直哉が、当時学生だった木下利玄・里見弴と三人連れで上方旅行を試み、奈良を訪れた。その旅行記は、三十二年後の昭和十五年（一四〇）、里見によって『若き日の旅』にまとめられるが、志賀にも「寺の瓦」の一篇があって、この旅のちに白樺派の人々を奈良大和路に導くようになったことをおもわせる。

会津八一（（歌人））（歌人）が失恋の痛みをいだいて初めて奈良を訪れたのもこの年の夏のこと、大和

の風物やみほとけを詠んだ短歌二十首を得て、奈良・大和と固い絆^{きずな}を結ぶことになった。大正十年（一九二一）はじめて日吉館に泊まった会津は、以後この宿を愛し、ここを拠点にして古美術の研究にしたがい、十三年、隣りの飛鳥園の美術写真家小川晴暘を指導して『室生寺大観』を発刊するとともに、最初の歌集『南京新唱』を出版した。その自序に「われ奈良の風光と美術を酷愛して、其間に徘徊することすでにいく度ぞ。遂に或は骨をここに埋めむとさへおもへり」と書き、巻頭につきの一首をおいた。

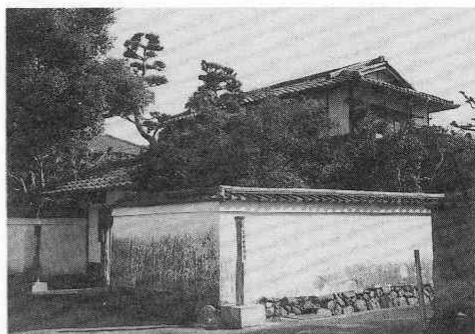
かすがのに おしてるつぎの ほがらかに あきのゆふべと なりにけるかも

すでにこのころまでに、さきの木下利玄をはじめ与謝野晶子・佐佐木信綱・釈迺空^{しやくのうくう}（折口信夫）・島本赤彦・中村憲吉など、奈良・大和を詠んだ歌人は多かったが、帝室博物館長として、大正七年（一九一八）から十年まで、正倉院曝涼の責任者として毎年秋に奈良に來泊した森鷗外も、十一年一月の『明星』に「奈良五十首」を発表した。その中につきのような一首がある。

夢の国 燃ゆべきものの 燃えぬ国 木の校倉の とはに建つ国

会津はその後、昭和四年（一九二九）から浜田青陵・天沼俊一らとともに飛鳥園から『東洋美術』を刊行（小川晴暘が大正十三年から出していた『仏教美術』を改題）、昭和十五年に『南京新唱』をはじめ六〇歳にいたるまでの和歌を網羅、歌集『鹿鳴集』を編んでいる（昭和二十一年「自」註鹿鳴集を發行）。

なお、奈良出身の作家に上司小剣があった。かれは明治七年（一八七四）に手向山八幡社の神主の家に生まれ、小学校教員を経て、読売新聞社文芸部に入社、小説『木像』（明治四十四年）、「お水取り」（大正九年）などを書いたが、大正九年（一九二〇）に同社を辞めて作家生活に入った。十五年に発表した随筆「奈良」に「奈良の自然は云はば築山・泉水の類で、王朝時代の人事と結びついでるの美しさをもつてゐるのだ」などとあって、かれの奈良の美への心情がうかが



志賀直哉旧邸（高畑町）

われる。

志賀邸の 志賀直哉が山科から奈良の幸町に來住したのは大正十四年
サロン文化（一九二五）四月、四三歳のときであった。昭和四年（一九二九）高

畑に家を新築してここに移り、十三年まで在住する。志賀の新邸は数奇屋造りを基調に洋風なども巧みに取り入れた建築で、瓦敷きのロビーと板敷きの広間があった。かれのあとを追うように高畑に居を構えた滝井孝作をはじめとして、志賀をしたって來住、來遊する文人たちが相つぎ、その広間は文化サロンとしてにぎわった。作家の池田小菊のほか、画家の浜田葆光・若山爲三・彫刻家の加納和弘・美術写真家の小川晴陽などがその常連であった。いわゆる高畑サロンである。志賀はここで「万曆赤絵」以下の短篇を執筆するとともに『暗夜行路』を完成するが、幸町時代の思い出を中心とした短篇を残した。昭和十二年に隨筆「奈良」を發表、古都奈良についてこう

「鬼」と高畑の家をえがいた小品「池の縁」を残した。昭和十二年に隨筆「奈良」を發表、古都奈良についてこう書いている（『草春』所収）。

兎に角、奈良は美しい所だ。自然が美しく、残っている建築も美しい。そして二つが互に溶けあっている点是他に比を見ないと云って差支へない。今の奈良は昔の都の一部分に過ぎないが、名画の残欠が美しいやうに美しい。

志賀のあと間もなく、大正十四年に奈良に住んだのは滝井孝作であった。かれは高畑に居を構え、昭和五年八王子に移るまで在住するが、この間のある日の出來事を題材に小説「博打」を書き、「妻よ子よ春日の杜の冬日和」などの句を残した。奈良を去ってから「奈良の春」「奈良の夏」「志賀直哉対談日誌」「美しい大和の寺々」などの

随筆を書いている。

滝井について大正十五年、志賀と同じ白樺派の武者小路実篤が奈良に来て水門に居を定めた。かれの奈良滞在はわずか一年余りであったが、この間「新しき村奈良支部」をつくり（志賀や奈良在住の洋画家たちも応援した）、餅飯殿町会所で新劇「だるま」を上演したり、泰西名画展覧会を開いたりした。

志賀を慕った女流作家に、網野菊と池田小菊があった、網野が志賀のすすめで来寧、文学活動に入ったのも大正十五年のことで、三年ばかり滝井邸の近くに住んだ。池田（和歌山県出身、田市の出身）は、奈良女高師卒業後鍋屋町に住み、教員生活のかたわら文筆生活にしたがったが、大正十五年志賀を訪ねて師事、昭和二年（一九二七）教職を退いて作家活動に専念、志賀邸のサロンの常連となった。志賀が東京へ去った昭和十三年秋に発表した「奈良」は、一三年にわたる志賀との交流をえがいた私小説で、芥川賞の候補になる（戦後は婦人運動にも活躍、昭和四十二年鍋屋町の自宅で逝去）。

昭和三年には、志賀と親しかった小林秀雄が奈良に来て一年ばかり浅茅ヶ原の江戸三の亭に住み、後年エッセイや講演で奈良での生活や奈良の伝統文化を語った。その後、小林が下宿していた江戸三の亭に入ったのは尾崎一雄であった。尾崎ははじめ志賀に傾倒していたが、後には志賀の作品に違和感をもち、随筆「奈良日記」では、人事よりは馬酔木（あしび）や鹿など自然の風物に関心を示している。

昭和六年には、谷崎潤一郎と佐藤春夫が揃って志賀を訪ねているが、この年、異色ながらプロレタリア文学の小林多喜二も志賀邸に泊まっている。なお大正十五年から四年ばかり（一五歳から一八歳にかけて）飛鳥園に入社していた島村利止は、志賀・滝井に師事し、戦後に『奈良登大路町』（昭和四十八年刊）『奈良飛鳥園』（昭和五十二年刊）などの小説を書いて昭和初年の奈良をえがく。

志賀をとりまく高畑サロンは、昭和十三年志賀が東京に移るまで続いたが、その後志賀と親しかった東大寺観音



「水辺の鹿」

浜田葆光作

院の上司海雲を中心に奈良在住の作家・画家たちによってつくられた好日会が高畑サロンを引き継ぐかたちになった。

近代奈良の美術界 奈良に洋画が盛んになったのは大正中期であった。明治の末期ごろに洋画講習会が開かれたというが、奈良

の洋画壇が花咲いたのは、大正五年（一九一六）に二科会系の浜田葆光が奈良に住むようになってからであろう。奈良公園をはじめとする奈良の自然が、彼を招いたといわれる。浜田について翌六年には、文展の中心にあつて写実を追求した山下繁雄も奈良に来住したし、ついで八年には春陽会の足立源一郎も高畑にアトリエをつくった。この年から十五年ごろにかけて、小見寺八山・新井完・九里四郎らをはじめとして、奈良師範学校に来任した谷山藤四郎や足立を募ってきた若山爲三、さらには小野藤一郎などが相ついで奈良に来住した。また、奈良市出身で東京で活動

していた普門暁は、大正九年に未来派芸術協会をつくったが、奈良に来住した浜田・山下・足立とともに展覧会を開いたりしている。

やがて足立の高畑のアトリエは、前記気鋭の画家たちの集まる所となつて、いわゆる高畑サロンとして知られるが、そのころ高畑に在住した志賀直哉を中心とするサロンとも交流し、昭和初期の高畑地方は文人・画家たちの文化的雰囲気のみちていた（のちに足立のアトリエは、彼の門下の中村義夫に譲られる）。昭和六年（一九三一）を迎えて浜田を中心に新光会（のち鹿光会）が結成されるが、この同人たちは全関西洋画協会や二科会へ進出していった。ついで七年には若山のアトリエを中心に奈良

洋画会がつけられ、公募展を開いたりしているが、この会の人たちは春陽会や新興洋画協会展で活動するようになる。この奈良洋画会が長くつづいたのは、志賀直哉や辰巳利文、文具店の島田常次郎らの支持があったからといわれる。また翌八年には東京美術学校系の谷山や小野らは東台会をつくり、同十年には一たん解散していた新光会の同人に二科会系や独立美術系の新進の人も加わって奈良美術家連盟を結成する。昭和初期の奈良洋画壇は活気にあふれていたといえる。なお山下繁雄はその死を迎えるまで奈良に在住して軍鶏^{しやうけい}画家として知られ、足立源一郎は後年山岳画家として名をあげる。足立はかれのもとにあった辰巳利文らと『古美術行脚大和』を刊行して古美術の紹介にもつとめた。

彫刻では、奈良人形の流れから出て竹内久一に師事し、純彫刻の域に進んだ竹林高行があったが、さらに注目されるのは加納鍔哉であろう。鍔哉は岐阜に生まれ、禪門に入ってから仏道と画法を修業し、やがて彫刻・絵画に妙技を現し、鉄筆の世界を開いた。フェノロサや岡倉天心と古美術調査にしたがい、古美術にわが国の美の原点を見出してその古典的表現を追及、奈良に住んで名器の模作にあたったが、とりわけ正倉院伎楽面の模作が有名である。晩年の彼は高畑町の邸を最勝精舎と名付け、大正十四年に没した。彼に師事した市川鍔琅は、鉄筆その他の技法を受け、森川杜園の造形をも吸収して精緻で独自の境地を開いた。

奈良で陶芸といえば赤膚焼であるが、この時代に自ら西ノ京に窯を築いてその名声を高めたのは松田松柏であった。なお、奈良市近郊の安堵村の富本憲吉は、一代の名匠として知られ、その陶芸に凝縮された広い芸術的感覚は改めて述べるまでもない。つぎに漆芸の吉田立斎も忘れてはならない。かれは漆芸家陽斎の子で古代の漆器を研究し、密陀絵に用いる密陀油の製造に成功するとともに、象牙の彫刻である撥鏤^{はくろう}の法を見出した。これらの技法を駆使して多くの作品を残したが、明治末年から大正九年にわたる正倉院御物の修理に大きな業績を残し、大仏殿の鴟

尾に金箔をはったりもした。

大正期の奈良の美術界は以上のように伝統芸術と奈良の自然に育まれて活況を呈したが、さらに書道には、磯城郡田原本の出身で奈良で活躍した辻本史邑がある。かれは奈良師範学校卒業後、東京の日下部鳴鶴の教えを受けて書道に専念、大正十四年に浄教寺に寧楽書道会を始めて機関誌『寧楽』を刊行し、さらに書道誌『書鑑』を出して広く書道界に貢献、「関西の辻本」と称せられて斯界に重きをなした。なお、戦後まもなく日本書院を創立している（昭和二十年、二十四年に、（昭和二十年、二十四年に、日本書院と改称する。））。

最後に、美術写真についてふれておく。ここに美術写真というのは、豊かな奈良の仏教文化財を主な対象にして写真を芸術にまで高めたものを指し、それはまた美術史の研究に大きく寄与することになったものである。その第一人者は工藤利三郎であろう。工藤は徳島市に生まれ、若くして儒学を学び、明治十年（一八七七）に写真を志し、翌十一年三〇歳のとき、文化財の海外流出を嘆き、写真技術でこれを永久に記録しようと志したのだという。明治二十六年に奈良に来て菩提町に住み（（のちに春日野町に移る））、美術写真家として本領を発揮することになった。三十四年に奈良を訪れて工藤の精華堂に立ち寄ったドイツ人医師エルウィン・ベルツは（（明治九年から二十六年間にわたって東大で医学を講じ、日本近代医学の父といわれる））「例の写真師のところで、たくさん写真を買求めた」と書き、美人の一人娘についてふれたあと「父親は強壯で元氣一杯だが、飾り気のない一本調子の人物、五十七歳にしては、十五も若く見える」と工藤の風貌を伝えている（（ベルツの日記））。その作品は、明治四十一年から大正十五年（一九二六）の間に出版された『日本精華』全一一冊となり（『東洋精華』『日本』、『歴代美術選』も出版、その声望は全国に及んだ。かれは、昭和四年（一九二九）に八二歳で世を去るが、その春日野町の写真館は精華苑と名付けられ、彼と交友した人々には、岡倉天心・ベルツ・ウォーナー・会津八一・喜田貞吉ら錚々たる人々があつた。ついで仏像の写真では大正十年に開かれた飛鳥園がある。当主小川晴暘は洋画家でもあつたが、写真ではとくに仏

第三章 奈良市の発展

像の表情をよく表現したといわれる。会津八一や辰巳利文その他美術史研究者と交わり、大正十三年から『仏教美術』を刊行する（昭和四年『東洋美術』と改題。三六九頁参照）。また、鹿鳴荘の永野雄吉も、明治三十年代から古美術の写真をてがけており、藤田三思堂は明治末年から国宝の絵葉書を出している。

社 寺 と 近代は一般に宗教には冷淡であるといわれるが、奈良は古く社寺の都であつたし、キリスト教のキリスト教 流入もあったので、これらについて若干みておくことにしよう。

大正三年（五四）の『奈良市勢』によれば、神社は全部で四九社、そのうち官幣大社一（春日神社）、県社一（手向山八幡社）のほかは村社一一、無格社三六となっている。その後十三年に漢国神社が県社に昇格する。

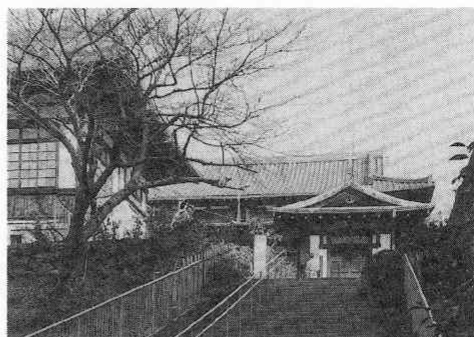
すでに幕末に生まれた教派神道も浸透しており、その教務所として天理教が一七、大成社四のほか黒住教・金光教・神宮教・神習教・実行教などが各一をもっている。

これに対し大正三年の寺院数は七〇か寺、宗派別の寺院数は表23にみられるとおりで、浄土宗が圧倒的に多く、ついで浄土真宗となっている。また、表24にみられるように、大正五年当時市内の四か所にキリスト教会もあつて、三六三人の信者を数えている。

表23 宗派別寺院数

宗 派		寺 院 数			
		大正 3 年	大正15年	昭和 5 年	昭和12年
浄 土 宗	宗	28	27	27	27
	宗	11	12	12	19
	蓮	6	5	8	4
	台	4	4	4	4
	言	2	8	7	1
そ の 他	華 嚴 宗	7			
	真 言 律 宗	6			
	融 通 念 仏 宗	3	15	15	
	律 宗	2			
	法 相 宗	1			
計		70	71	73	

『奈良市勢』『奈良市勢一覽』『奈良市勢要覽』による。



日本聖公会奈良基督教会聖堂

このほか明治年間に樺本村・井上町・花芝町・公納堂町に講義所をもっていたし、明治二十年から三十四年まで、私立奈良英和学校を経営（ただし、二十七年から、校名は私立奈良尋常中学校）、大正二年奈良英語学校をおこし、昭和五年には親愛幼稚園を開設する。

カトリック系の天主教は明治十三年に最初の布教を行ったが、同三十七年にワグネル神父が菩提町に仮聖堂を建て、その後東寺林町・東城戸町・阿字万字町をへて、昭和七年に登大路町（旧赤十字社跡地、現・興立美術館のところに）に奈良天主堂が献堂された（昭和十五年に日本のカトリックと改称）。この天主堂は、大正十四年山口から来寧、阿字万字町の仮聖堂に住んだビリヨ

奈良に進出したキリスト教では、日本聖公会の活動が最も活発であった。明治十八年（一八八五）にマキム師が椿井町の民家を借りて説教したのが初めて、同二十年に奈良基督教会を創立するが、説教所はその後東向中町、花芝町と移り、大正元年（一九一三）に東向南町に教会堂が建てられた。なお、明治四十三年古市に在住した一九歳の西条八十が、聖公会の婦人宣教師キンボー（明治三十三年から大正五年まで在住）のもとへ通って英語を習ったことが知られる。日本風の現在の聖堂が献堂されるのは、昭和五年（一九三〇）のことである。

表24 キリスト教会（大正3年）

教会名	教派	位置	創立年月	教会員数
奈良基督教会	日本聖公会	東向南町	明治20年	272
奈良浸礼講義所	日本浸礼基督教	東城戸町	同 35年	31
聖ペトロポーロ教会	天主教	阿字万字町	同 39年	55
平城基督教会	日本組合教会	今御門町	同 23年	5

大正3年『奈良市勢』による。

ン神父が、祖国フランスから贈られた二万円を投じて建てたもので、神父はその完成をみることなく昭和七年四月にその生涯を閉じた（天主堂は戦後、東（向北町に移される））。大正デモクラシーの風潮は、キリスト教の活動に多少とも有利に働いたといえようか。なお、大正十二年（一九二三）、デンマーク系の米人宣教師リンドストロムが高畑破石町に奈良アライアンス教会を開き、昭和二年（一九二七）まで布教にしがっている（北村信昭『奈良いまは昔』）。

3 大衆文化の登場

新聞の隆替

大正から昭和にかけて、東京・大阪など大都市を中心に新聞・雑誌・ラジオ・レコード音楽・スポーツなどの大衆文化が発展し、その動きは地方都市にも及んだ。

『日新新聞』が姿を消したあと、奈良県が堺県・大阪府に合併になったこともあって、奈良にはしばらく地方紙が存在しなかった。奈良県再設置とともに、県会議長今村勤三が社長になって明治二十一年（一八九六）『養徳新聞』（やまと）が創刊されるが、二十四年四月『大和新聞』と改題、改進黨系の新聞となった。これに対し、自由党系の新聞として、同年六月『新大和』の創刊をみた。その後、二十年代は両紙の対立がつづいたが、三十一年二月市制が施行されると、同年八月に『奈良新聞』が創刊され（『大和新聞』に、た赤堀自助の創刊、）、ついで三十六年九月には『奈良

朝報』が創刊された（『新大和』の主筆、岡本兼治郎の創刊）。『奈良新聞』は、淡紅色のタブロイド版の新聞だったので「赤新聞」と呼ばれ、四紙の中では紙代が一番安かった（明治四十五年ブランケット型）。これら日刊四紙のほか三十三年に月六回発行の『伊和新報』（伊賀と大和の意、タブロイド版）の創刊があったが、明治末には廃刊になったらしい。

大正三年（一九一四）当時、奈良で発行されていた新聞は表25のとおりである（特定の分野のものながら雑誌も発行されていたようなので、合わせて掲げておく）。当時の新聞は政党の機関紙的性格が強く、『新大和』は立憲政友会系、『大和新聞』は立憲国民党系、『奈良新聞』は立憲同志会―憲政会系、『奈良朝報』は準立憲政友会系であった。

創刊以来政治的立場を固執して部数をのばせなかった地方四紙に対し、明治二十五年（一九一〇）の大阪鉄道の開通以降、『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』両紙の進出が目立ってきた。『大阪朝日』はすでに早く四十四年に奈良通信部を設けている（大正三年奈良支局となる）。大正四年（一九一五）十月から『大阪朝日』は紀和版を設け、六年九月から大和版を独立させたが（昭和五年五月から奈良版と改称）、これと時を同じくして『大阪毎日』も紀和特別号をつくり、ついで奈良特別号を分離し、七年から奈良号とする（大正十五年から奈良版に改題）。こうして全国紙である両紙が、本格的に奈良に進出してきたのであった。

第一次世界大戦後、奈良の新聞界は激動の時期を迎えた。大正八年に『奈良新報』、十二年に『大和毎日新聞』と『新愛知』の傍系紙『大和旭新聞』が創刊され、同年六月には『新大和』が『大和日報』と名を改め、政友本党

表25 大正3年（1914）の新聞と雑誌

名 称		所在地	創刊年月
新 聞	大 和 新 聞	東城戸町	明治24年4月
	新 大 和 新 聞	角 振 町	同 24年4月
	大 新 奈 良 新 朝 報	高 畑 町	同 32年8月
	大 新 奈 良 新 朝 報	東城戸町	同 36年8月
雑 誌	大 和 自 治 新 報	花 芝 町	大正2年2月
	奈良県教育会雑誌	登大路町	明治25年9月
	奈良市教育通報	椿 井 町	同 25年2月
	大 和 自 治 新 報	登大路町	同 44年6月

大正5年『奈良市勢』による。

の機関紙となった。したがって十三年の一時期、『大和新聞』『大和日報』『奈良新聞』『奈良朝報』『奈良新報』『大和毎日新聞』『大和旭新聞』の七紙が乱立していたことになる。このうち『大和毎日新聞』は、菊判四ページの小型日刊紙のため「はななみ新聞」といって冷やかされたといひ（大正十四年七月からフ、ランケット型とする）、『大和新聞』は当時ほとんど日刊紙の体をなしていなかったという。

この十三年ごろを境に、奈良の新聞界は淘汰・整理の過程に入った。『大和新聞』は国民党の機関紙として再出発しようとしたが、十三年十一月『神戸新聞』の経営に移されて、一年ばかりで廃刊となり、十五年十月をもって『奈良新報』が休刊、昭和二年（一九二五）には『奈良朝報』も廃刊の運命となった。十四年七月『大和毎日新聞』が版を大きく改めるにあたって政治的中立を標榜した。この前後から各紙とも政党の機関紙的性格を薄めるが、『奈良新聞』はひきつづき憲政会―民政党を支持する立場をとった。

大正末年から昭和のはじめ、大和日報社が「社機」を擁していた一時期があった。梅本幸一（飛行士（大淀町六））が複製の愛機を歩兵五十三連隊の練兵場にとどめ、宣伝やピラまきにしたがつていたが、大和日報社の吉村賢治がその梅本の世話をしていた関係で、梅本機を「大和日報社機」と呼んだのだという。ついでながら奈良に飛行機が来たのは、アメリカ帰りの飛行士坂本寿一が和歌山から連隊の練兵場に飛来したのが最初である。その後大正五年五月にアート・スミスが飛来、三日間にわたって宙返りなどの妙技をみせ、延一五万人の観衆を酔わせたことがあり、十三年九月に梅本機が飛来、十一月には御所出身の吉村飛行士が練兵場で

愛機を組立てて飛んだことがあった。「大和日報社機」が活躍していた十五年ごろ、吉村飛行士のほか女流飛行士前田あさ

の（天理市福住出身）も愛機を飛ばしていたという（北村信昭「奈良いまは昔」）。

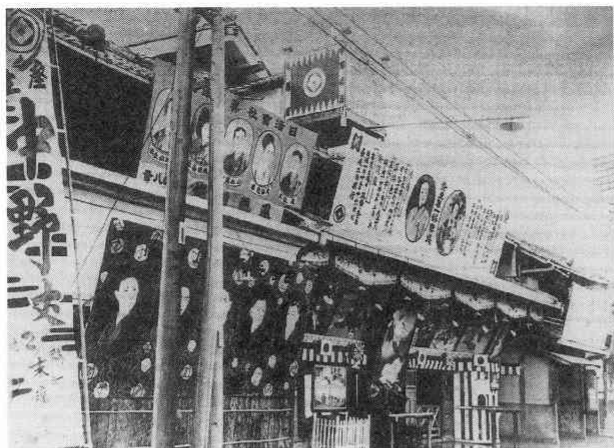
その後、昭和十年ごろ『大和旭新聞』が姿を消し（昭和十一年版では新愛知新聞奈良支局となっていた）、昭和十四年には経営不振のため『大和毎日新聞』も廃刊、残ったのは『奈良新聞』と『大和日報』の二紙になった。やがて戦時統制が新聞にも及び、一県一紙の方針にしたがって、この二紙と高田町（現大和）の『中和新聞』が合併、『奈良新聞』の社屋と通刊号数を引き継いで昭和十六年一月一日から『奈良日日新聞』が発刊されることになる（戦後の昭和二十一年「大和タイムス」が創刊され、二十年「奈良日日新聞」は「新奈良日日新聞」と改題する。日本新聞協会編「地方別日本新聞史」）。

ラジオ・蓄音器 大正十一年（一九二二）週刊誌『週刊朝日』『サンデー毎日』が発刊され、十四年に大衆雑誌『キング』映画・スポーツ が登場、昭和に入ると文学全集などの円本や岩波文庫があらわれ、奈良の書店にも並ぶようになった。

た。やがて婦人雑誌も人気を呼ぶようになり、活字に親しむ市民がふえた。昭和二年（一九二七）の『奈良新聞』に、つぎのような記事がみえる（七月十・五日付）。

一円本の発行や世界名著の分売、しかも廉価販売で、読書界は俄然階級的旧観を脱して大衆への一大進出を見、此処にプロレットカルトの一部実現を見た。労働問題・社会問題・経済問題などの書籍や雑誌の種類がふえ、値下げによって雑誌の売れ行きが伸びた。

こうした活字文化だけでなく、大正十四年七月には東京と大阪でラジオ放送が始まった。七か月後の十五年二月、奈良市内の受信機台数は三一九を数えたが、翌昭和二年二月の保有戸数三五四戸、大阪放送局は伸びが悪いとして鮎石受信機組立の講習会を開いている。五年一月からラジオ番組が新聞に登場するが、当時は単局で、放送時間は午後〇時五分から九時四〇分までに限られ、浪曲や義太夫、レコード音楽や講話などの放送が多かった。六年四月



尾花座 (中野重宏氏蔵)

には奈良公園内に大阪放送局（JOBK）の放送塔が建てられ、十年五月には市内のラジオは三七三八台を数えるようになった（県下で六六〇二）。十二年七月の日中戦争の全面化以降、国策遂行上ラジオ受信機の設置が奨励され、急速に家庭に普及することになった。

蓄音器は、明治四十三年（一九一〇）から国産のものが出まわり、レコードも普及しはじめるが、すでに四十年ごろ餅飯殿の松石商会の店頭にアメリカ製の蓄音器が並んでいたという。明治から大正にかけての蓄音器は朝顔型の大きなラップのついたものだったが、大正末ごろから箱型のものに変わっていった。

大正の半ばすぎからレコードが大量に売れはじめ、流行歌がさかんに吹きこまれて都市を中心に歌謡曲が流行するようになった。少しあとのことになるが、昭和九年、肘塚町に帝国蓄音機株式会社のレコード工場が設立される（昭和十九年ティチク工業株式会社と改称）。

大衆娯楽の花形として映画が流行するようになった。明治から大正にかけて奈良には尾花座（町屋）と中井座（町屋）の二つの芝居小屋があった。中井座の前身は明治三十二年（一八九七）ごろにできた玉井座といわれ、そのころには尾花座もあったらしいが確かなことはわからない。いつから奈良に活動写真としての映画が登場してきたかも明らかでないが、明治四十二年に尾花座が改築されて奈良劇場株式会社が設立されているので、そのころから映画

の上映が始まったかもしれない。大正に入ってから上映回数がふえてくるが、そのころは芝居をやったり映画をやったりで、時には活動写真混合芝居（活動写真と実演を交互に織りませた連続劇）も上演されて人気を呼んだという。大正七年（一九一八）大阪で旅館を営んでいた中野平兵衛が奈良に進出して尾花座を買収、九年七月から活動写真の常設館とした（北平田町にあった楽座も買収して電氣館と改称、映画の上映を行う）。ほぼ同じころ中井座も映画館に姿を変えたとみられる。ことわるまでもなく当時の活動写真は無声映画だったので（日本でトキキ映画がつ、これにともない両劇場の活動弁士（声色を使って映画の説明にあたる人））たちは十年一月に弁士組合を結成している。十三年には活動常設館として中央倶楽部（南市、のち中央映画劇場）も開館、映画は市民の代表的な娯楽となった。洋画も上映されるようになり、幸町に住んだ志賀直哉も中井座に足を運んだ。十五年一月十八日の日記に「夜武者と散歩、中井座にへオペラの怪人」を見る」とあり、二月十六日には「愚かなる妻」をみたりしている。昭和九年（一九三四）の市内の映画館三、十七年を迎えて奈良ニュース映画館（ニュースのほか劇映画も上映、十九年奈良映画劇場と改称）もできる。

スポーツへの人気もしだいに高まってきた。すでに明治四十三年、春日野運動場の開設があったが、大正四年（一九一五）全国中等学校野球大会（現全国高等学校野球大会）が始まって野球に関心をもつ人がふえ、十四年には「オール・ナラ」という素人野球チームができたりしている。また、十年ごろ菩提町に子ども相手の乗馬クラブ「ボニー倶楽部」ができた。ロバと朝鮮馬一〇数頭を備え、荒池西方の空地を馬場を利用して経営したが（のち荒池東南、瑜伽、山北側の空地も利用）、あまり長つづきはしなかったらしい。大正十四年に、春日野運動場の東にテニスコートがつくられ、昭和四年（一九二九）に春日野プールができたのも、市民のテニスや水泳に対する関心の高まりに応えたものであった。しかし、当時は野球に限らずスポーツを支えていたのは、男女とも中等学校の生徒たちであった。大正十四年春日野運動場で、第一回女子中等学校陸上競技・バレーボール大会が開かれているが、昭和三年女学校における野球チームの結成が禁止されたところから、女子のスポーツはどことも下火になっていく。

第三章 奈良市の発展

昭和九年版の『市勢要覧』によれば、活動写真館三、寄席三、玉突^{たまつき}其他遊戯場五一のほか、旅館一三六、飲食店三四九、料理屋一二五、カフェー・バー六一、芸妓一二〇など、市民の娯楽や観光客目当ての施設がふえていることがうかがえる。玉突とあるのはビリヤードのことで（^{撞球場ともいっただ}）その遊戯場は「玉突き屋」といわれ、大正から昭和にかけて奈良でも数多くみられた。

図書館の動向
大衆文化を支えた都市中間層の間に読書の習慣が広

まるにつれ、公共図書館の役割が大きくなった。当市の図書館の動きについてふれておくことにしよう。

近代における図書館ブームは、明治三十二年（一九一九）の図書館令の発布から四十年ごろにかけてと、大正十二年（一九二二）ごろから昭和初期にかけての時期だったといわれる。大正のはじめの奈良には、すでに県立戦捷記念図書館のほか私立図書館として石崎文庫と南都仏教図書館があった。その開設の事情についてはすでに述べたが（^{第三章}）大正三年（一九一八）の概況は表26のとおりである。このうち南都仏教図書館は九年に東大寺本坊西側に移されて東大寺図書館と改称、奈良県立戦捷記念図書館も、十二年に奈良県立図書館と名を改めた。

県立図書館の開館日は年間三四〇日と多く（^{現在は二八〇日前後}）、明治四十三年から大正十二年までは七・八月を除き夜間開館も行っていた（^{大正十四年三月十四日の規則改正で「知事ノ認可ヲ得テ館長ノヲ定ム」となり、その後の開館時間不明}）。明治四十四年から、「県下各郡市役所

表26 大正期図書館の概況

上段…大正3年（1914）
下段…大正15年（1926）

名 称	所在地	蔵 書 数		閲覧人員
		和 漢	洋	
県立戦捷記念図書館	登大路町	28,058	756	47,318
奈良県立図書館		44,492	1,027	*47,488
私立石崎文庫	高畑町	12,738	10	420
		12,810	0	52
私立南都仏教図書館	雑司町	23,375	0	1,258
東大寺図書館		27,654	0	1,547

大正3年は、大正5年『奈良市勢』、大正15年は昭和元年度『奈良市勢一覽』による。ただし、※印は『奈良新聞』昭和2年4月9日付による。

県立学校公立図書館」に対し巡回文庫を始めているが（（使用期間、六〇日））、大正七年から読書会を発足させるとともに、十一年から図書の「通送貸出し」（（荷造及送料は、借入人が前納））も始めている。図書携出（（貸出））については、開館以来資格規定があり、「一、成年者ニシテ直接国税金三円以上ヲ納ムル者、二、満十七年以上ノ者ニシテ前号ノ資格を有スル保証人ヲ設クル者、三、官吏・公吏及官公立学校職員」のいずれかに該当する者に限られており、それがなんと昭和二十八年（一九五三）の規則改正まで生きつづける。なお、読書会は昭和十一年に第一〇〇回記念会を迎えている。

大正期には、古瓦の展覧会（大正四年）や「南都古版本並模範展覧会」（大正六年）などの文化行事を催したことが知られ、大正十年四月、全国図書館協議大会が開かれたときには、法隆寺の金銅葉師仏の光背銘をはじめ古記録・古文書・写本・古図・拓本などを陳列、一般の観覧にも供したという（（「奈良」新聞））。

図書館運動がさかんだった昭和のはじめのことだが、日本最初の公開図書館といわれる芸亭院の創設者、石上宅嗣の顕彰運動がおこされた。昭和五年（一九三〇）が宅嗣の没後一一五〇年にあたったからである。県立図書館・東大寺図書館・奈良女高師附属図書館および天理図書館の関係者によって、昭和三年七月、県立図書館内に石上宅嗣卿顕彰会が設立され、その事業がすすめられた。五年十月十八日、天理図書館の落成祝賀式につづいて、その前庭で石上宅嗣卿千百五十年祭および顕彰碑除幕式が行われ、顕彰会が編さんをすすめてきた『石上宅嗣卿』も、

表27 図書館の概要（昭和8年）

名 称	位 置	図 書 冊 数			開館日数	閲覧人員
		和漢書	洋書	計		
奈良県立奈良図書館	登大路町	60,248	1,146	61,394	324	52,770
東大寺図書館	雑司町	31,924	—	31,924	327	47
石崎文庫	高畑町	13,374	—	13,373	280	80
奈良済美図書館	奈良第四小学校	920	—	920	365	675

昭和9年版『奈良市勢要覧』による。

同日付で発行された。

なお、昭和五年三月、小さいながら奈良第四小学校内に奈良済美図書館が創設され、市内の図書館は四館を数えることになる。(大正十年田原小学校内に平和記念通俗図書館も開設されている)。昭和八年の状況は表27のとおりである。

